

## 押山大日堂の仏像調査について

2017年6月24日

押山歴史探検隊大日堂調査班

2014年の交流館歴史講座で大日堂の説明をおこないましたが、このときは稲武町史などの文献資料のまとめと泥縄で覚えた仏像の見方の初歩といった内容でした。

しかし、ここの仏像仏具には興味深い点が多々ありそうに思えたので、その後も調査を続けてきました。

幸い専門家のY氏のご指導もいただけて、その結果、予想をはるかに超える収穫に恵まれたので、今回6月24日交流館歴史講座においてその一部＝2体の仏像を現地で紹介しました。

今回その内容を掲載し、皆様の更なるご指導を仰ぎたいと考えます。

内容は以下のとおりで当日の資料ほぼそのままですが、若干補足がしてあります。

### 1、押山大日堂の概略

大日堂の成り立ちの大まかな説明です。3年前の資料の圧縮版ですが一カ所間違いを訂正しました。【画像右下 道元禅師（旧）→弘法大師（今回）】

### 2、仏像の見分け方の基本

大日堂の仏像は、同じひとつの像のうちでも部分によって制作年代が異なっていたり、仏像制作のルールから逸脱している箇所があったりするなどかなり複雑です。

そこで、説明の助けになればと思い、まず仏像の基本に関する以下の資料を用意しました。

①仏像は4グループ（タイプがある！）

→ 今回の2体はどのグループ？

②仏像の顔の移り変わり（時代によって変わっていく！）

→ 今回の2体はいつごろつくられた？

③如来像と菩薩像について（どこに注目する？）

### 3、押山大日堂の大日如来（一木造りであることや細部の注目点について）

### 4、押山大日堂の聖観音菩薩（宝冠の年代や本体・台座の修理状況・破損した手についての推理など）

以上

## 押山大日堂の概略

玉蔭院（明暦 2 年＝西暦 1 6 5 6 年）～明治）

大日堂（慶長 5 年＝西暦 1 6 0 0 年）～）

三十三観音堂

合体

なんでもありの大日堂



### ①大日堂

|                |                          |
|----------------|--------------------------|
| 16 世紀前半（天文年間）  | 川手城主の山田主水助景隆が祀る          |
| 1600 年（慶長 5 年） | 名主の伊藤弥三郎が新たに造仏           |
| 1693 年（元禄 6 年） | 村外れからススベ地区へ移転、大日如来も修復    |
| 1743 年（寛保 3 年） | 大雨により堂が大破、4 年後再建         |
| 1855 年（安政 2 年） | 大水害（卯年の荒れ）により堂が大破、2 年後再建 |

その後、明治になって現在地に移転。平成 16 年には、集会所を兼ねて新築し大日如来も修復しました。

1600 年 関ヶ原の戦い  
1615 年 大阪夏の陣

### ②玉蔭院

明暦 2 年（1656 年）に龍光院（曹洞宗）の末寺として建立されましたが、明治 6 年廃寺となりました。このとき、寺の仏像仏具などは大日堂へ移されました。

### ③押山観音堂（三十三観音）

1700 年代のごろ（推定）、小馬寺を中心に稲武・旭・足助にまたがる「三州加茂郡西国三十四カ所」の観音霊場ができました。稲武地区では、四番川手蓮華堂、五番大慈院、六番押山堂、七番夏焼観音堂、八番武節一円寺（その後廃寺により桑原龍光院）、九番黒田堂（正寿寺）、十番小田木堂の七か所が札所になり、また 1850 年代には各札所の「御詠歌」がつくられました。

（押山堂の御詠歌） たき沢の 音もひひくや み熊のの ほとけのちかい あらた成りける

以上



## 仏像は4グループ



【如来】 修行して悟りを開いた存在。釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来など。



【菩薩】 人々を救いながら修行中。観音菩薩、文殊菩薩など。私見では如来=水戸黄門で菩薩=越後の縮緬問屋の光右門か？



【明王】 高校の生活指導の先生。コラ〜ッ。人間の煩惱を炎で焼き尽くす。不動明王（お不動さん）が有名。

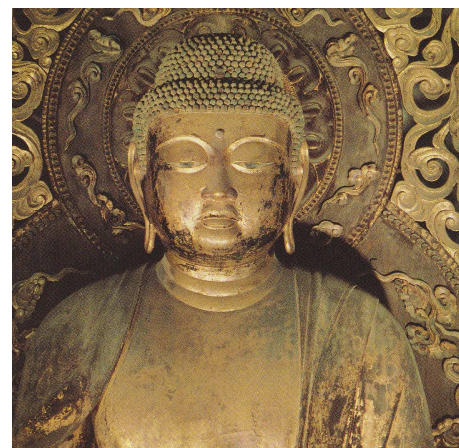


【天部=てんぶ】 金融・芸能・警備等の専門職集団。大黒天、弁財天、金剛力士、帝釈天など。～天は元インドの神さま

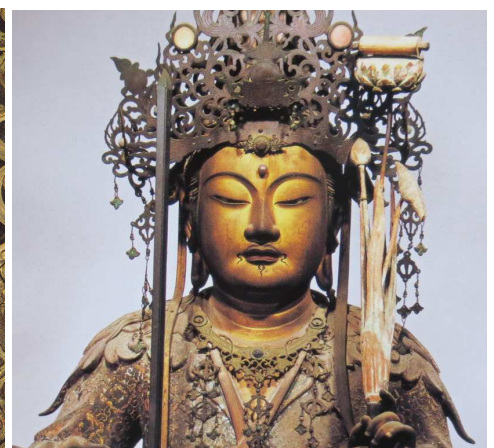
## 仏像の顔の移り変わり



【飛鳥時代】 7世紀初・釈迦如来・杏仁眼（びっくり眼）とアルカイクスマイル（古拙の微笑）が特徴。宇宙人的！？



【平安時代】 11世紀・阿弥陀如来・定朝作・純和風でふっくら柔らかだが、表情は冷やかで、上から目線に感じる。



【鎌倉時代】 13世紀・文殊菩薩・快慶作・人間に近い生き生きした姿でありながら、人間を超えた仏の品格もある。



【室町～江戸時代】 人形化・マネキン化・一部（円空・木喰）以外は見るべきものは少ない。why？



## 如来像と菩薩像について

### 如来像について

如来像のモデルは出家した後の  
お釈迦さまである。

出家姿なので、飾りは身に着けず、ペラペラの布一枚だけの姿となっている。

但し、大日如来のみは、如来の中でも特別な存在であるため、飾りを身につけさらに手の組み方（智拳印または禅定印）で差別化を図っている。

### パンチパーマ

螺髪（らほつ）

アクセサリーは無し

衲衣（のうえ）

禅定印

この形なら  
阿弥陀如来



一般的な如来像

数メートルの長方形の布で、糞掃衣（ふんぞうえ）とも言う。

宝冠

重厚

瓔珞（ようらく）＝胸飾

長髪

天衣（てんね）

智拳印

条帛（じょううはく）＝タスキ

大日如来  
特有の組み方

大日如来像だけは・・・

### 菩薩像について

菩薩像のモデルは出家前＝王子の頃のお釈迦さまである。

王子の姿なので、冠や胸飾り・ブレスレットなどを身につけている。

基本的に大日如来と似ているが、智拳印や禅定印を組むことはない。

なお、地藏菩薩だけは僧侶の姿である。

宝冠

繊細

長髪

瓔珞（ようらく）＝胸飾

天衣（てんね）

水瓶か蓮華を持っていた。

条帛（じょううはく）＝タスキ

一般的な菩薩像

錫杖（杖）を持っていた。

宝珠

衲衣（のうえ）

地藏菩薩だけは・・・

# 押山大日堂の大日如来(だいにちによらい)

光背は2004年の修理のとき新品に交換

如来のなかで大日如来だけは長髪である。髪の毛が青い(紺青)のは、仏像をつくるうえでの約束ごと。

江戸時代(元禄頃)の顔である。できた当時(平安後期?)はもっと丸かったが、その後削ったのでこうなったと考えられる。

向かって左の肩に天衣(てんね)がかかっているのは菩薩のスタイル。大日如来のものではない。

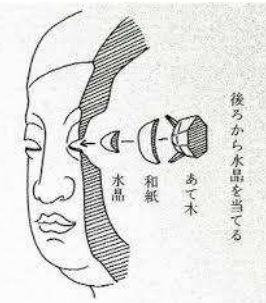
この手の組み方は智拳印(ちけんいん)と言う。大日如来だけの組み方である。

膝は後でつくられた

宝冠と胸飾は江戸時代中期(元禄)以降のもの。大日如来用としては重厚さに欠け小さい。他の菩薩などから借用したか、あまりこだわらずに購入したか? ただ、少ないがよそに同様の例はある。



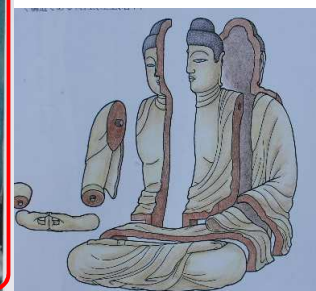
頭の内側をくりぬいて、水晶製の玉眼(ぎよくがん)を入れている。これは鎌倉時代から普及しているが、平安時代などの仏像を改造することもよくおこなわれていた。



頭・体・両肘を一本の木から彫り出した一木造(いちぼくづくり)である。肘から先は別につくって組み合わせている。この構造から、平安時代後期に建立された可能性が考えられる。

解体修理中の画像。膝と胴体の組み合わせ方も平安時代後期

鎌倉時代以降は、別材で作ったものを組み合わせるやり方になった。



もともと観音像としてつくられ、その後大日如来に改造された可能性もある。





## 押山大日堂の聖観音菩薩(しょうかんのんぼさつ)

宝冠は繊細であり、江戸時代以前のもの。顔・胴と同時代(鎌倉時代後半)の可能性もある。表面に細かい模様が彫られたハイレベルなものである。

光背(こうはい)は繊細であることから江戸時代初期かさらに古いものと考えられる。

宝冠のこの部分は江戸時代。デザイン的に硬く繊細さが無い。

金泥(こんでい)は江戸時代に塗り直している。顔・胴体と衣服では塗り方が違い、表情が変わらないように配慮している。

台座は江戸時代前期～中期  
出来映えがよく、仏像に見合ったレベルにしている。

左右の鳳凰が表裏逆になっている。  
後世、修理したとき逆になった？

目には玉眼(ぎよくがん)が入っている。

顔と胴体は鎌倉時代後半と考えられる。



左手は握られている。  
人差し指だけ折れている

冠と顔が最初からセットだとすると、聖観音の可能性が大である。(もし冠が無ければ大日如来である可能性も考えられた)



もとはこうだった？

